

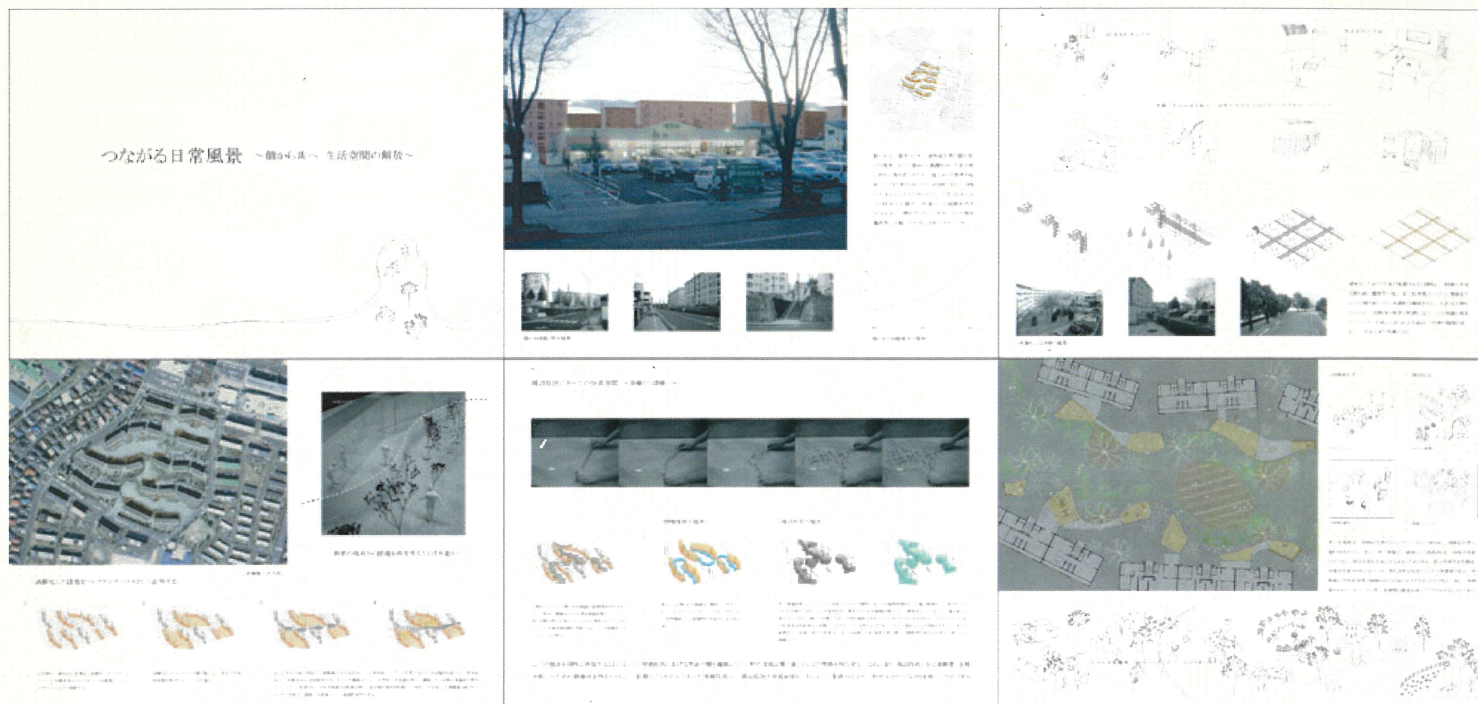
団地再生卒業設計賞 奨励賞

つながる日常風景

一個から共へ 生活空間の解放

山田 祥平

宮城大学



団地の外部空間とその周囲の街との関係を問い直し、両方の住民の新しい出会い方をテーマとした作品。団地の外周部の境界線を住棟の隣棟間に引き込むという、シンプルでわかりやすいデザインに焦点を絞ったことで、提案が明快となった。高齢化や人口減少は、こうした郊外では何も団地内に限られたことではない。団地内の隣棟間隔確保の結果である見るだけの外部空間を地域の資産ととらえて、そこにアクティビティを生み出す仕掛けとしての諸機能を導入しているわけだが、提案内容が大げさになっていないことがリアリティにつながっている。(小嶋一浩)

概評

内田 祥哉

今回は前回（第六回）に比べ、応募者も慣れてきたように見えた。

審査員も、毎年一人が交代する三年の任期のシステムが安定してきた。そこで、審査の視点も、急激には変わらないが、徐々に変化している。初期の頃は、再生の内容がハードな面に集中していたが、最近は居住の仕方に目が向き、今回は団地の生活と、周辺居住者との関係が注目されるようになった。それは、応募側にもその意識があることの反映であるが、社会的にも、この問題が注目されているからだろう。それは、何れは町並み保存などにも関係があり、社会現象としての集住が、自然現象に近い安定した居住形態を形成する過渡の問題でもあると理解すべきかも知れない。

第七回 団地再生卒業設計賞 授賞作品

主催：NPO団地再生研究会 / 一般社団法人 団地再生支援協会

協賛：三協立山アルミ株式会社
野原産業株式会社

団地再生卒業設計賞 内田賞

近藤 真巧 (明治大学)

団地再生卒業設計賞

豊後 亜梨紗 (近畿大学)
木全 瑛二 (名古屋工業大学)

団地再生卒業設計賞 奨励賞

山田 祥平 (宮城大学)

応募期間：2009年12月上旬～2010年3月31日（水）

審査委員長 内田 祥哉 (東京大学 名誉教授)

審査委員 木下 庸子 (工学院大学 教授)

小嶋 一浩 (東京理科大学 教授)

藤森 照信 (工学院大学 教授)

応募登録数：22点

応募作品数：19点

団地再生卒業設計賞 内田賞
Augmentation HOUSES

—既存団地を敷地周辺に近づけていく次世代集合住宅—

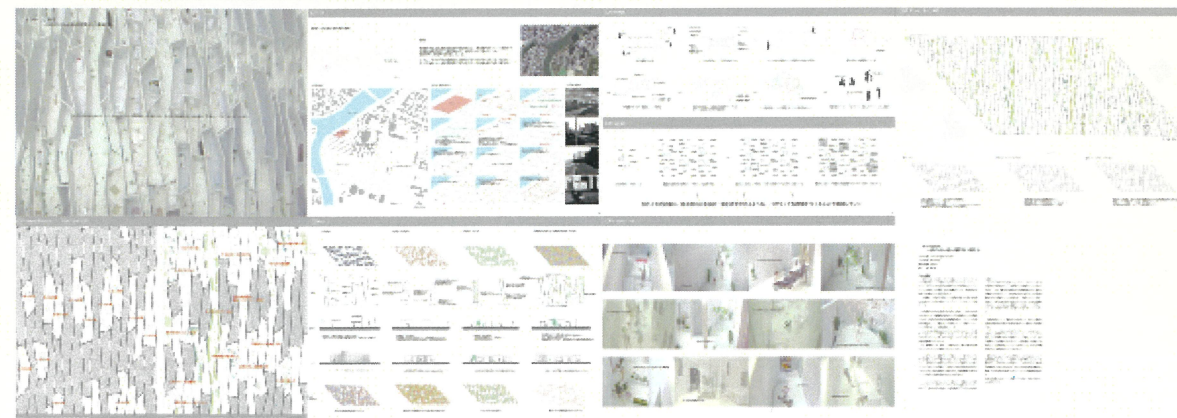
近藤 真巧
明治大学



周辺環境の中で「島」として浮かんでしまう団地を、建て替わりを契機にどう周辺と連続させるかをテーマとした作品。その周囲に著しく異なる状況が併存している霞ヶ丘アパートをターゲットにしたことで、様々なスケールやかたちに応答する必要性が生じ、そのことで作者の意図がたいへんクリアに示されている。提案に至るまでの的確な分析と作品との応答性が確かであり、しかも、提案がダイアグラムに留まることなく、大きな模型によって示される室内と外部との関係を含めた空間の質を獲得していることで最優秀案である内田賞を獲得した。(小嶋一浩)

団地再生卒業設計賞
せいかつしあう

豊後 亜梨紗
近畿大学



団地を配置計画、住戸計画ともに、リ・プログラミングするという力作である。計画地は広島市中央区基町の中層市営アパート群の一角で、歴史に残る県営基町アパートの高層住宅群から一望できる位置にある。この案は敷地周辺の十分な分析の基に成り立っている。

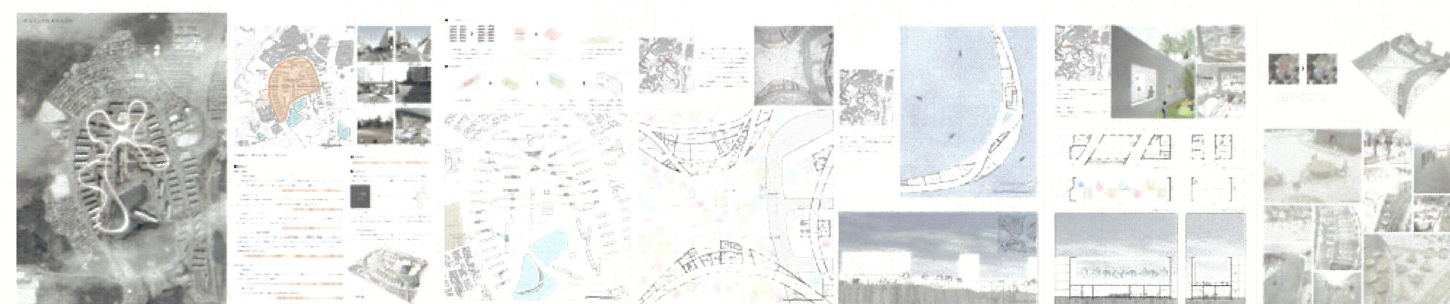
計画地は人々にぎわう川沿いの土手や緑地帯に隣接していながらも、周辺との間に存在するレベル差のためにアクティビティから切り離されているという現状を改善するための提案である。川沿いの土手から計画地を横断する複数の動線と、それらに直行する隣接街区につながる動線のマトリックスが配置計画の下敷きとなり、計画は敷地全域にわたって余白を残さず展開されている。

一方住戸計画においては住戸機能を解体、細分化した上で、住戸をプライベート性の高い行為のための「ユニット」と、プライベート以外の行為のための「屋内公共空間」とで再構築している。これらが周辺から人を導入する「屋外公共空間」とともに組み合わせられながら住棟が形成される。

この案の魅力は何と言っても、集合住宅の共用部の新しいつくり方であろう。しかし惜しまれるは、敷地と周辺との関係を表現する広域の断面が示されていないことである。(木下庸子)

団地再生卒業設計賞
オルフェの生まれる団地

木全 瑛二
名古屋工業大学



5つか6つの案を見て、団地再生というのは、既存建築再生の宿命として複雑で複合的で、目をこらして読みとらないと事態が分かりにくいものだ、と思った。あと十数案もこの調子で見なくちゃいけないのか、と、うんざり感が出はじめた時、この案が出現した。案が出現というのはヘビのような姿が紙の上に躍っているのだから、そう感じていいだろう。

私にはヘビに見えたが、木下審査委員はリボンと言っていた。ヘビかリボンか、どっちでもいいように思われるだろうが、ちがう。私にとってはちがう。リボンは工業製品の布から生まれた形だが、ヘビは生き物にちがいない。それも原始時代から人類が生命現象のシンボルとしてきた生き物なのだ。

戦後という科学・技術こそが全てだった時代に、その粋ともいえるべき自動車産業の町豊田市に作られた団地にヘビが登場し、科学・技術のこれまた建築的粋ともいえるべき団地を貫くのである。

この光景を見て、私として評価しないわけにはいかないだろう。
建築の案としては“一発芸”的だが、意外に現実性もある。(藤森照信)